

喜怒哀楽

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミュージズ・コーポレーション 喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

8-9
Vo1.93

CONTENTS

●笑顔礼讃西東

蓮田川柳の会 (埼玉県・蓮田市) 2~3

纏句会 (東京都・中央区) 3~4

●詠み人スクランブル

《夏の終わりを感ずる風物詩といえど何ですか?》 10~11

新潟ぶらりノ 小林病翁の碑一教育と反戦 12

詠み人の『リレーエッセイ』歌人 佐藤りえ 16

ここに響く言葉

新潟県糸魚川市出身の批評家・随筆家

若松英輔氏の著書からここに響いた言葉を抜粋してご紹介します。

人は、一瞬たりとも同じ存在ではあり得ない。今の私は、明日の私とは違う。私は毎瞬変化している。だから、書くこともまた、今にしか行われ得ない一回きりの営みになる。意識するかしないかは別にして人は、いつも、今しか書くことができない言葉を生み出している。――『悲しみの秘義』より



▲『悲しみの秘義』表紙や見返しも9種類のデザインがある

●若松英輔

1968年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。

2007年『越知保夫とその時代 求道の文学』にて第14回三田文学新人賞評論部門当選。

2016年『叢知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦』にて第2回西脇順三郎学術賞を受賞。

温古知新 ④7

「菜根譚」19

天候の落ち着かない最近ですが、体調など崩していませんか? 今回は、69項から、みなさまとともに学んでいきたいと思えます。

天の機織は測られず。抑えて伸べ、伸べては抑え、皆是れ英雄を播弄し、豪傑を顛倒する処なり。君子は只だ是れ、逆に來たれば順に受け、安きに居りて危きを思ふのみ。天も亦其の伎倆を用うる所無し。

(天のカラクリは予測できない。押さえつけては伸ばし、伸ばしては抑え、英雄を翻弄し、豪傑の足をすくって転ばせる。上に立つ懸命な者は、向かい風が吹いた時は追いつ風と受け止め、安全な時に危機を意識するのみである。天は、そのような者を妨害することはできない。)

その時の状況にとらわれず、常に流動的に受け止める事が秘訣、という事でしょうか。

燥性なる者、火のごとく熾にて、物に遇わば則ち焚く。寡恩なる者は氷のごとく清く、物に逢えば必ず殺す。凝滞固執する者は、死水腐木の如く、生機已に絶ゆ。俱に功業

を建てて福祉延べがたし。

(心が渴いた者は、火のように激しく、出合った物をみな焼く。情の薄い者は、氷のように冷たく、出会った者を殺す。物事に強く固執する者は、澱んだ水や腐った木のように、生かす力がない。このような人達は、大きな事業を起こし、人を幸福にするのは難しい。)

心を広く持ち、心温かで物事に固執しすぎない人こそ、大きなことを成し遂げるのである。

福は徼むべからず。喜神を養いて、以って福を召くの本と為さんのみ。禍は避くべからず。殺機を去きて禍を遠ざくるの方と為さんのみ。

(幸福は求めて得られるものではない。楽しみ、喜ぶ心を養って、幸福を招く本とするのである。災難は避けられるものではない。殺気だった心を無くすことで、災いを遠ざける事ができるのだ。)

豊かな心を持った結果、幸福を得られ、災難を避ける事ができる。己の内を変えていくことが大事なのですね。

今回は71項まで。暑さ厳しき折ですが、心に余裕をもって、心身ともに健康に過ごしていきたいものですね。(古川久美子)

蓮田川柳の会

会長 熊谷則男様

連絡先 埼玉県蓮田市蓮田4-1-136-12
TEL 048-1764-2760

4月5日(水)、埼玉県蓮田市の中央公民館で行われた蓮田川柳の会にお邪魔しました。

皆さん和気あいあいと机の向きを変え会場を整える。至るところからお菓子が供され、遠足気分なのは私だけで、1週目は句会、3週目は勉強会と熱心に川柳に取り組んでいる句会だ。今日の席題を投句し終えると、各選者が別室で：と言いたいところだが、部屋の隅3か所に分かれて選をする。



▲「どうする」の選者 松田重信さん

まずは

●宿題1「どうする」松田重信選

秀／偶然の再会春の不整脈 協子
五客

バラ色の余生崩れる低金利 泰夫
ハードルを上げて明日に舵を切る 育司
十字路が次から次へ浮かび出る 隆宏
悪霊も守護霊も居るあみだくじ

草陰で又夢を見る蝸牛 美佐緒
恒

人／趣味ひとつ絶って介護の色を足す 育司
地／消したいアドレスがいつまでも縛る 泳朱
天／にんげんの寂知悩ます核のゴミ 泰夫

(軸)／坪庭に花の種でも蒔きましょか 重信



▲「恐怖」の選者 熊谷則男さん

●宿題2「恐怖」熊谷則男選

秀／外出は友と一緒を身を守る 貴以子
秀／蜘蛛の糸綾取りのよう世間様 協子

五客

幽霊が見つめられてる恐ろしさ 隆宏
温み無く鬼畜と化した世の現し 泳朱
平和の灯じわじわと消え近未来 重信
フクシマに眠る悪魔の目覚め時 重信
ライバルの梯子はづしている美談 育司
人／恋模様変わり果てたかストーカー 泳朱

地／村度が思い通りになる恐怖 榮子
天／一週間妻の無言がまだ続く 美佐緒
怖いねえ(笑)。

(軸)／突然落下屋根の融雪 則男

そして、今日が選者デビューという泳朱さんには、ベテランの美佐緒さんが選句の時から一緒についてアドバイスされる。



▲「高い」の選者 嶋田泳朱さん

●宿題3「高い」嶋田泳朱選

秀／富士山頂下界の花火下に見る 貴以子
五客

ハイテクの渦に吞まれて權を投げ 榮子
青い空の深さに迷うシャボン玉 美佐緒
あすならば高い階段のぼれそう ひろ子
うれしさと乱高下するわが心 ひろ子
太い筆大志潜めて絵馬に描く 重信
人／背伸びして遠望の宙葱坊主 重信
地／長生きを恐縮してる高齢者 泰夫
天／蟻の列月への道を歩き出す 美佐緒

(軸)／白雲の仰ぎ足らずで途遠く 泳朱

席題は「被災地の今」。皆さん懸命に考えていると「5分延長しませんが」の声があがる。
一人3句選、そのうちの特選1句は2点、他は1点として集計する。

天／12点
被災地を絞ると落ちる阿弥陀仏 美佐緒

流れがよく心に沁みってくる／「被災地を絞る」の言葉に感動した。阿弥陀仏で止めたところで迷わず選んだ／再

建がうまくいかず更に絞られている被災地。災害のむごさと復興の難しさ／絞ると落ちる、はやはり涙ではないか。仏様に改めて祈っているという被災者の心が詠まれてる／被災地の不満やわだかまり、阿弥陀様しか頼るものがない／絞ると落ちるがこの句のよさ。「被災地を絞る」はある意味穿ちかもしれないが、なかなか出て来ない言葉。この表現はベテランの句。

地／9点

あの時を想いて辛夷いまも泣く 榮子
辛夷が擬人化され、被災者が救われないという状況を詠んでいる／表現に無駄がない／3月は辛夷が咲くころ。その時に辛夷の中にどんなものが失われていったのか、画像として浮かんでくるような句。

質問：「いまも泣く」で辛夷が擬人化されているとのことだが、単なる辛夷として受けたらいけないのか？

■被災者の人たちの想いが擬人化されたのでは？／これは作者の想いだと思ふ。あの頃に戻ってほしいという自分の気持ち、白い花をつけた辛夷に託した。もう白には戻れない。

地／9点

風評が裸足になつて春朧 重信

春朧なので、春になつて一見緩やかに見える風評だが実は大変ということ？／風評が裸足になつて、は開放されたということではなく、土足でどかどかどかやってくるということ。行く末が見極められない状態を朧に託したのでは？朧という止め方できれいに見せ

ているが、皮肉のきいた句／そのように難しくは理解できなかったが、流れが非常にいい。

人／7点

被災地の格差が目立つ7年目 泰夫

その通りの句だが、格差がほとんど広がっている感じがする／えーっと、もう忘れちゃいました。でもよかったですね(笑)。特選でいただきました／この句の命は七年目で止めたところ／わかりやすい句だし、余韻が残る。格差が少しかたい？説明句のように見えて説明句ではない／一読してストレートで無駄がなくてよかった。

質問：「説明句」という言葉が時々出てくるが、見分ける方法は？

■朝起きて顔を洗って飯を食う、これが説明句。そうではなく飯がうまかったとか、昨日の夢が気になったとか、一行の中に物語やドラマを入れると説



▲切磋琢磨し合えるお仲間のよさをつくづく感じた蓮田川柳の会

明句ではなくなる。

被災者に気配りしない毒言葉

毒言葉で選んだ／毒言葉は変えた方がいい／作者が意図したことはもつと違う言葉で表現できる／言葉尻とか？／例えば「被災者に背中を見せている言葉」でもいいと思う、向き合っていないわけだから／着想がいいから化ける句だと思っ

御詠歌を皆でと覚えてやすらぎを

御詠歌でやすらぎを得ない人もいる。例えば「御詠歌を皆でと覚えている港」と取りあえずおく。そうすると風景が出て、心情が出てくる。下五で「やすらぎを」まで言うところまでの句になる。その先をいくなら「御詠歌を皆でと覚えて鬼がくる」とか、下五を変えた方がいい。

質問：今日もあつたが、誤字を書いた場合その句はボツになるのか。

■ここは勉強会だから訂正することもあるが、字を間違えるということは日本語を間違えるということ。まずは辞書をひいて確かめるのが基本中の基本。選者の立場になったらそれくらい厳しくしてください。

★月2回の句会と勉強会を着実に積み上げ、即吟やしりと川柳といった試みで瞬発力を培う。そして、今年からは全員が選者に挑戦！という新たなステージが用意されている。ベテランが初心者をうまく導き、場所を変えての二次会も終始川柳談義。うまくならない、上達したい、という熱量は清々しい。(木戸敦子)

笑顔礼讃西東

纏句会

主宰 伊藤伊那男様

連絡先 「銀漢亭」

東京都千代田区神田神保町2-20
TEL 03-3264-7107

まだ若葉まぶしい5月27日、日本橋「鮎の与志喜」で開かれた第81回纏句会にお邪魔しました。主宰は「銀漢亭」主宰で神田にある「銀漢亭」のご主人でもある伊藤伊那男さん。

本日の兼題は「卯月」「蛇」「山女」「石楠花」、席題は「峰入り」「南瓜の花」「明易」と当季雑詠3句、合計10句出しの10句選、うち1句を特選とします。今日は特別に主宰の母校伊那北高校の後輩で「海程」同人、ニューヨークから帰国中の月野ぼなさんがゲスト参加。合計12名の句会スタートです！

小綺麗なお鮎屋さんのカウンターを横目に、不肖木戸も「峰入り」って何!? 初めて聞いたんだけど...と、当日の席



▲主宰の伊藤伊那男さん(左)とゲストの月野ぼなさん

題を半ばヤケ気味にでっち上げる。個室にひしめき合いながら、選句、披露をした後はカウンターに場所を移し、美味しいお酒とお料理をいただきながら、各人が採った特選について講評をし、あとは自由に意見を述べていく。

朝の茶の香り卯月と思ひけり 大和

新茶とは言わずさらりと朝の茶と詠んだことで、落ち着いた生活がにじみ出た。
※

峰入りの先づの一步に躓けり 伊那男
峰入りを調べたら、初めて参加する人も結構いるらしく辛いだろうな、と。なかなかうまくない迎りをうまく詠んだ。

※峰入り：修験者が奈良県の大峰山に入って修行すること。

山寺の裏のがれ場の花南瓜 直

お寺で煮炊きした南瓜の種を裏のがれ場に放置したら、ひとりでに花が咲いていた。その花をまた精進料理に使うのかも。

商談を東踊の幕間に 健彦

まさか大学の教授の句とは(笑)。お客さんを招待してそこで商談を絡ませる。ビジネスとしてはある。

この句は特選にしようか悩んだ。東踊りを見に行く人はだいたいお座敷に行くような人なのでお呼ばれで来ている。普段お座敷では会わないが「おお、あんたも来てたのか」と商談が始まる、そんな空気を見事に捉え、京都の都踊りに対しての東京の空気を伝えている。

花南瓜黄のくたくたに雨の中 高水
作者の名前を聞いてああなるほど

な、と(笑)。くたくたにという軽さと雨の中という平易な言葉、なかなかできないがこういふ句を作りたいたい。

水を足す度に巻かれる屑金魚 秋葉男

水の渦に巻かれるということだと思いが、そこがちょっとわかりにくい。屑金魚の宿命。

蛇消えてなほ草叢の揺れやまず 健彦

蛇が見えなくなってもまだ叢が動いている。蛇の長さ、特性がうまく出ている。

お告げなどしさうな蛇の舌の割れ

秋葉男

蛇はちよろちよると舌を出し、怖いところがある。蛇をあがめてきた歴史がわかるような、思わず見入ってしまった感じがよく出ている。

告ぐるたびくちなはの丈長くなる

伊那男

この句のおもしろさは「そこで蛇に会っちゃってさ」と、人に言うたびに



▲歳を重ねてもなお爽やかな皆さま!

その長さが長くなっていくところ。蛇のおどろおどろしさを伝えている。

糸流しまた糸流し山女釣り 新紙

これは山女を釣っていないと作れない句。何回も糸をしつこく流すんですよ。さらつと詠まれていて感心した。

ぼぼな：こんないい会があるのかと今日は心底楽しんだ。ニューヨークも25年目なので25句選ばせていただいた。

一声もて一叢制す行々子 洋征

葭切の音が叢一帯を制している様子が、一と一でうまく表現されている。

石楠花や風の澄みある比叡口 子貢

比叡口の様子、心の様子がよく出ている。

琥珀色残るグラスや明易し 新紙

ブランデーではなく、琥珀色といったところに技が効いている。

主宰：これ角瓶クラスだよ(笑)。

並足の馬の一例夏木立 大和

並足がよくて、更に夏木立との取り合わせのうまさ。抑制の効いた美しい絵のような句。

※並足：速くも遅くもない普通の足並み。

◎特選三句

どくだみや隠れん坊の鼻先に 大和

隠れん坊で何かの陰に屈んでいた。郷愁もある。

香水やマンハッタンに昼と夜 海村

よくぞおっしゃいました。マンハッタンに昼と夜、まずは私に挨拶をしてくださいました。そして昼はビジネスの顔、夜は歓楽街の顔。そこに香水。昼の香水と夜の香水の違い。俳句の美で、ごちゃごちゃしたマンハッタンをよく掬い取ってくださいました。

主宰：動詞を何も使っていない。だからくつきりと印象に残る。

石楠花のなぞへに岩を踏みて立つ 大和

※なぞへ：ななめ、斜面
なぞへという言葉を教えていただいた。くらくらしちゃった。

主宰：作り方は地味だがしつかりとした写生句。よくニューヨークの人が採ったね。

ぼぼな：斜めになっているところに咲いている石楠花。そこからにじみ出てくる強い情感がある。今日はいいい句にたくさん出会えてうれしかった。

主宰：ぼぼなさん、ありがとう。来年も待ってますから。まあ、生きていればだけど。だからこそ一期一会。今日の句会がもう一度再生できるかといったら絶対ない。芭蕉の時代なら奥の細道で一生涯に一回だけ行き合って、句会を持つ。今生に一回限りの句会を大事にすること。この句会は一生に一度しかないと思って句を作る、選ぶ、清記をする、披露をする、これだと私は思う。歳をとると切実に思う。来月会うからいいやと思ったら絶対いい句はできない。永遠に続く話はない。

◎特選二句

二句とも私しか採っていない。ダメかなあと不安になるとき(笑)。選句は本心に難しい。

峰入りを称え熊野の木々騒ぐ ぼぼな

今日の題で作ったんでしょ? 躍動感があって峰入りを詠んで珍しい句で、わつと立ち上がった。健彦

浄土への道はあやうげ練供養 健彦

観音菩薩に扮した二十五人が練り歩く、奈良の当麻寺の練供養が有名だが、その姿があやうげな様を見て、人の世の悲しさや人の弱さをうまく詠みこんだ。

山女釣る早瀬の渦を腰に巻き

という句があったが、上流にいるのは岩魚、その次が山女で一番下が鮎、と棲み分けがある。そういうことを前提にしないと、山女の本当のところはわからない。例外として山女は腰がつかないが、一般論として山女は腰がつかないほど深いところはいい。

一番下界には寡(あひ)がいる/それは岩魚い/そういうことも鮎(あひ)魚い/それを俳句に活かせばいいのに(笑)。

★急な病で急遽来れなくなった方、予定変更で来られるようになった方、时空を超えてニューヨークからいらした方、主宰が強調されていた一生涯で一度しかない一期一会の句会を、取材という立場にありながら堪能させていただいた。普段は男性だけの句会だが、どんな状態・状況であろうと、その時々々の最善のパフォーマンスを出す面々であることは容易に想像できた。(木戸敦子)



▲主宰の『銀漢亭こぼれ断一そして京都』抽選で3名の方にプレゼント!ふるってご応募ください。充実の面白さです。

投稿作品

川柳

※誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。 今回の投稿作品数は、296でした。
※しめきり 2017年9月15日(金)まで ※作品は原稿どおりに掲載しております。

- 1 電車では両手つり革の場捜す 原 崇雄(埼玉県)
- 2 若き日の姉を偲んで語る叔母 細川光子(栃木県)
- 3 うまいなあケイタイ耳に中座する 石原 岳(群馬県)
- 4 戦争は嫌だと云って準備する 守屋高雄(岩手県)
- 5 親の夢詰めて重たいランドセル 濱田イサオ(福岡県)
- 6 風になって心のひだを撫でにくる 小山恵美子(大阪府)
- 7 長生きが万病の元とナットクし 山口静一(東京都)
- 8 青い山脈これが私の応援歌 木村洋一(新潟県)
- 9 急がねばサキが短かくなりそうで 山口千鶴子(東京都)
- 10 玉音に土下座の母を忘れない 鈴木義雄(福島県)
- 11 空梅雨に延長国会幕を閉じ 花貫 寥(東京都)
- 12 森友も加計も覆う黒い霧 宇都木安子(東京都)
- 13 国会にうすら笑いの怖さ見た 奥那於子(大阪府)
- 14 近頃は今・金だけ自分だけ 久保壽雄(北海道)
- 15 政権の綻び始む怪文書 齊藤安弘(神奈川県)
- 16 熟すまで時間のかかる片思い 山崎一嘉(愛媛県)
- 17 難聴と杖で世間が狭くなる 木村誠一(神奈川県)
- 18 終演を思い巡らす午睡かな 関本 守(新潟県)
- 19 父の日の父は生き生き洗刺と 鈴木蝶次(宮城県)
- 20 電車ではジツと静かなスマホ族 長谷川庄二郎(千葉県)
- 21 オレオレに家は娘でオレいな 大久保アヤ子(東京都)
- 22 定年後下に広がる以下余白 目黒豊光(福島県)
- 23 複数犯と見る枝豆の減り具合 丸山芳夫(東京都)
- 24 埋み火を抱いて孤愁の瀬を渡る 小林榮子(埼玉県)
- 25 責任はあると言っただけ取りはせず 橋本世紀男(東京都)
- 26 一難が去って息つて妻の声 近藤富夫(東京都)
- 27 ルネサンス足の痛みもやすらいで 油谷博子(兵庫県)
- 28 藪の百合仄かな風に香放つ 齊藤博洋(秋田県)
- 29 無防備な目はきよとんとし夏帽子 松田重信(埼玉県)
- 30 山法師咲き遠き友思ひ出す 竹本美美子(新潟県)
- 31 朝な夕な機嫌うかがふ目高かな 大谷 茂(埼玉県)
- 32 郭公の母呼ぶ声や一碧湖 古谷 力(東京都)
- 33 空つぼの象舎卵の花腐しかな 川口 襄(埼玉県)
- 34 明け易し越後小誌の文楽し 富樫和子(山形県)
- 35 退院の涙ぼろりと梅雨に入る 林 克(福島県)
- 36 湖心へと出てゆく小舟風青し 橋本良子(埼玉県)
- 37 苗名の滝初夏の感動同級会 五十嵐陸博(新潟県)
- 38 海境に播磨の鳥や秋の風 津田忠彦(岡山県)
- 39 忍び寄る介護の兆し道をしへ 有坂馨園(福島県)
- 40 ベビーカーに頼る散歩や梅雨晴間 星 一子(神奈川県)
- 41 遺言は未だに書けず梅雨に入る 井原穂子(東京都)
- 42 新緑の中を電車のひた走る 中嶋清子(佐賀県)
- 43 潮引きし青葦原や鷺一羽 鈴木清子(埼玉県)
- 44 母の日の母は仕事に母子家庭 山崎吉晴(群馬県)
- 45 煽やかに揺れる夏萩揺れ止まず 道給一恵(埼玉県)
- 46 蛇迂闊われも迂闊よ真二つに 黒澤正行(福島県)
- 47 言い訳のた、ぬ色して雨蛙 浦橋渴雪(兵庫県)
- 48 昼寝ざめいつも歳時記枕元 阿部幸子(宮城県)
- 49 椽の花おほかみ欠伸することも 小島岳青(新潟県)
- 50 昼寝癖三十分が板に付く 大橋恒次(新潟県)
- 51 すだれ吊る九十才の大仕事 宮宅芳子(岡山県)
- 52 裏庭に影舞抜ぐ竹落葉 杉原明子(静岡県)
- 53 そよ風や生家の跡の紫蘭咲く 小澤円梨(静岡県)
- 54 枇杷の実の浅き甘さや同期会 小林七重(新潟県)
- 55 土砂降りのほたるぶくろに侏儒の影 寺内 佶(埼玉県)
- 56 少年の長き立ち読み桜桃忌 大阿久雅子(埼玉県)
- 57 新たななる卒寿の首途村の花 岩村 昇(神奈川県)
- 58 ひとしごとと終えて喉なる夏暖簾 佐々木素風(新潟県)
- 59 隣家より枝伸ばしたる柿若葉 檜山とり子(東京都)
- 60 笹百合や彩香豊かに人よせて 西條公雄(埼玉県)
- 61 葉桜にまた来年と帽子とる 水落重式(新潟県)
- 62 郭公の声にめざめし旅の宿 田中恵美子(山形県)
- 63 旬の味瀬々の味あり鮎に酌む 内河邦久(東京都)
- 64 梅雨晴間空に抜けてシート干す 高崎登喜子(東京都)
- 65 生きてまた終戦の日や蝉しぐれ 阿部徳夫(宮城県)
- 66 瓦礫とはならずわが家梅雨の中 渡邊 清(宮城県)
- 67 花を愛で新種の牡丹買ひ戻る 中島光江(埼玉県)
- 68 夏至の日の出は四時二十五分なり 阿部 至(埼玉県)
- 69 十葉の十のたちまち千となる 井上静夫(栃木県)
- 70 夏の風うたたね寝顔こちよく 杉村美保子(岩手県)
- 71 桐の花雨むらさきに烟りける 平山千江(岩手県)
- 72 満々とジャスミン香るペリー寺 松尾らん(東京都)
- 73 薫風に精一杯の球を打つ 若月理依子(新潟県)
- 74 慰霊の日みるく世がやゆらですか? 福岡 悟(東京都)
- 75 草茂る川辺連ねて歩こう会 古川正栄(千葉県)
- 76 夏風邪を現実にする老の所作 佐野 繁(静岡県)
- 77 共存の地球弾くる鯛起し 緑川禎男(埼玉県)
- 78 どの指も水蜜桃の滴かな 近藤薫也(千葉県)

投稿作品



- 79 ウクレレが梅雨を手玉に楽器店
居原田連星(大阪府)
- 80 月見草男も優し夢二の絵
湯浅芳郎(岡山県)
- 81 雨風に一糸乱れぬ蟻の列
松前邦広(千葉県)
- 82 早苗饗や雨をたたへて踊の輪
上村元義(神奈川県)
- 83 ドナー待つ罪の意識や梅雨じめり
鳥取祥子(千葉県)
- 84 写メールに河内の蛍光りけり
三津木俊幸(千葉県)
- 85 静けさや風を見せずに竹落葉
重原 昇(新潟県)
- 86 鉄上げ一二三やカニダンス
佐野和彦(静岡県)
- 87 馬鈴薯の花に夕日のあそびけり
片山茂子(埼玉県)
- 88 夏草や終着駅の車止め
天野輝子(東京都)
- 89 大空は青いほど行く茅萱の穂
岩田 信(神奈川県)
- 90 稲妻や妻の遺影は笑みしまま
田中 昶(鳥取県)
- 91 水水ばかりの客で満席に
佐藤儀雄(北海道)
- 92 カーナビで探すバラ園雨となる
金子よし子(新潟県)
- 93 仙人掌の花の香りに目覚め起き
長谷部喜代子(大阪府)
- 94 宇宙扉の呼び鈴かタリスマスローズ
安部 哲(新潟県)
- 95 天地の恵みは富士山花菖蒲
神 一男(静岡県)
- 96 裸の子裸の父に肩車
村田吉雄(東京都)
- 97 悪阻女が口を押える栗の花
青木日出男(群馬県)
- 98 風入れの古きたんすや色とりどり
堀木和子(大阪府)
- 99 生活の錆を脱ぎたし衣被
黒岩正子(埼玉県)
- 100 梅雨晴間思いを刻む墓の石
塩崎須美子(神奈川県)
- 101 為すことのある幸せや胡瓜挽ぐ
吉村充治(埼玉県)
- 102 盆近し愛の讃歌を独り聴く
金子範子(高知県)
- 103 紅葉や大仏前で絵のようだ
五味田幸夫(東京都)
- 104 わらべ唄今日も夕日を背にして
湯浅暉子(石川県)
- 105 青簾夫の残せし釘のあと
堅田秀子(東京都)
- 106 二人とはひとりひとり心太
関山恵一(神奈川県)
- 107 夕闇の茅の輪くぐりの親子づれ
中田文子(大阪府)
- 108 更衣弟にゆずる体操着
井上氣海(広島県)
- 109 鉄の柄の父の手擦れや遠郭公
一瀬正子(埼玉県)
- 110 父母よりの便りたずさえホトトギス
井田由利子(宮城県)
- 111 暑ささえ力を抜いて柳かな
杉本敬治(愛知県)
- 112 梅雨ごもり脳活性とぬり絵する
大塚徳子(埼玉県)
- 113 右傾化に踏ん張っている水馬
望月哲土(東京都)
- 114 明易し庭草むしる大正人
藤井春三(埼玉県)
- 115 南天の花は稲穂の如く垂れ
磯部 力(新潟県)
- 116 露天風呂身重の嫁と河鹿聞く
吉里ひとみ(東京都)
- 117 生ビール飲みたいためのランニング
長峰正晴(千葉県)
- 118 葉桜や待つ間の不安歯科の椅子
清まさじ(静岡県)
- 119 新じゃがと大書きしているサラダかな
白戸麻奈(東京都)
- 120 春シヨール老いては老の美しさ
岩崎政弘(岡山県)
- 121 梅雨のごと心晴れざるニュースかな
青木ケン子(埼玉県)
- 122 籐椅子や岳父の話聞きし時
小林春雪(新潟県)
- 123 青大将首立て泳ぎ川渡る
津布久信雄(東京都)
- 124 梅雨の入り最高気温は三十度
田野井一夫(栃木県)
- 125 植田にも静かな波紋走り梅雨
鏡たか子(山形県)
- 126 日曜の時計は早し夕化粧
白川 博(新潟県)
- 127 野良猫のねぐらはいずこ額の花
今井勝子(新潟県)
- 128 妻の留守蕪たつぶりの卵焼き
坪田勝秀(鹿児島県)
- 129 坪畑の手入れに四肥風少し
菅原キイ子(宮城県)
- 130 一筋の光明ありて蓮咲く
川嶋法子(東京都)
- 131 青芝の真中で親子ボール蹴る
駒場京子(神奈川県)
- 132 「チチチ」と小鳥さえずるマンシオン
柳澤京子(宮城県)
- 133 病室の子の宿題を夏の雲
浅野信廣(宮城県)
- 134 純白を通す四葩もありにけり
岡村君枝(茨城県)
- 135 無人駅ゴールになりて汗ぬぐう
中村康浩(福岡県)
- 136 七夕や願いを星にたのみます
宇田川正雄(埼玉県)
- 137 単語帳はなさぬ少女青葉風
梶 鴻風(北海道)
- 138 秩父路の妻と見納め芝ざくら
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 139 幼等の夢天空までと竹の秋
木村 舩(山形県)
- 140 木を育て花を咲かせていまは梅雨
中山日出子(大阪府)
- 141 香水やポルシェの停まる撮影所
本庄準也(埼玉県)
- 142 梅雨深しガラスに映るシャンデリア
佐藤 信(神奈川県)
- 143 凱施門今に残りて風薫る
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 144 形代に息を一回吹きにけり
嶋田きよ子(奈良県)
- 145 大悲母の胎内めぐり玉の汗
中野勝子(鹿児島県)
- 146 風船葛一つ内緒でつぶしけり
服部八重子(東京都)
- 147 向日葵や卒寿祝ひに句集編む
平林義康(兵庫県)
- 148 妻強くなりし晩節冷奴
村山徳英(埼玉県)
- 149 昏れのこる湖に刻まつ螢狩り
大窪美代子(大阪府)
- 150 卒寿なほゆるがせならず麦の秋
日名子春実(群馬県)
- 151 指しやぶり泣き寝入りの子青田風
清水君江(埼玉県)
- 152 朝やけに一機遠くへ飛び去りぬ
白木和子(東京都)
- 153 日盛りや傘を上げる老紳士
田野倉訓郎(東京都)
- 154 学童の傘に重たし梅雨の朝
有田俊一(埼玉県)
- 155 身と心ひとつにならず振れ花
大内泰子(東京都)
- 156 夏蝶や海風に乗りて島に飛ぶ
中川義彦(新潟県)
- 157 父の日やティシャツもらう背に墨書
春口蓮男(静岡県)
- 158 遠花火少年の日に戻りけり
本間 進(新潟県)
- 159 ドライブの六甲山道七変化
間森 坦(兵庫県)
- 160 再びの帰る主なき蟬の穴
本間ミネ(新潟県)
- 161 腰を打ちベットに呻き蚯蚓這え
菅井文男(新潟県)
- 162 孵化待てる森青蛙沼の黙
山田富朗(埼玉県)

- 163 網戸より夜泣きの嬰も寝たらしき 高垣勝代(大阪府)
- 164 人垣と傘の花咲くアジサイ園 和崎治人(山口県)
- 165 バーナード・リーチの赤絵夏館 光成高志(千葉県)
- 166 甌穴の不思議とあそぶ青葉光 邑橋節夫(兵庫県)
- 167 だしぬけに熊笹叩く青時雨 石井一枝(埼玉県)
- 168 荒梅雨や一人揃はぬ夕の膳 安田芳江(茨城県)
- 169 夏めくや四万十川の草の波 沖 惇子(大阪府)
- 170 これほどの世話してなほも病むトマ 椋本望生(大阪府)
- 171 アカシヤの匂ひ散り敷く北の街 柴田恵美子(北海道)
- 172 自画像を葬り青山晚夏光 九法活恵(埼玉県)
- 173 トネルを出でて万緑迎へたり 堀川裕貴子(新潟県)
- 174 わが影は靴の下にぞ鵬外忌 松嶋光秋(東京都)

短歌

- 175 音もなく風の吹くまま渡良瀬の新緑 まぶしきこの季が好き 中沢敬子(千葉県)
- 176 七時間眠れる朝はコーヒートの香りと共に母現われて 早坂絃司(北海道)
- 177 真実の見えにくい世になりゆかん溢れるほどの情報あれど 桑原謙一(群馬県)
- 178 想い出のコスモスの花台風に吹き荒れし朝無残にも折れ 北澤実夫(東京都)
- 179 若きころ違和感ありしブラウスを取り出しみるに今に似合いて 市毛信子(東京都)
- 180 弟を四人逝かせし夫米寿子孫曾孫等の寿の席 田中豊恵(新潟県)
- 181 共に見し夕べ恋しや桜花舞ふ千鳥がふちの春を淋しむ 内藤明子(東京都)
- 182 新しき花を供へて独り酌む遺影微笑む亡妻の誕生日 久本にい地(岡山県)
- 183 五時前に起きて身仕度少し食べ歩き 佐伯セツ子(香川県)
- 184 いささかも元校長に触れるなく良き歌残し氏は逝き給う 土屋喜雄(山梨県)
- 185 大磯の吉田茂郎にぎわひて娘にさゝえられ段差をめぐる 高須 孝(愛知県)
- 186 遠い旅一人して来たように見る麻酔 寒川靖子(香川県)
- 187 ウグイスの間遠くなりて春はゆく朝露はらう風もさやかに 島田實貴男(群馬県)
- 188 ネモフィラ丘の紫海の波我はうもれて流され見ている 大鳥居牧子(東京都)
- 189 「なんぶ屋」のお膳懐かし母の味露 阿部澄江(宮城県)
- 190 今日もまた生きることとは食べること原価の高きひとり食作る 小笠原紗恵子(神奈川県)
- 191 はずむ声「南瓜、ジャガ芋、送ったからね」喜寿の友はすこぶる元氣 濱崎祥子(鹿児島県)
- 192 時折に思ひ出の中に漂うて心あそぶ才になりおり 渡部美代子(山形県)
- 193 表彰状拝したる役職三十年微力ながらも人世の為に 峯岸信子(東京都)
- 194 天地の塵と生まれてわが余命いくばくなるや五月闇ゆく 長谷川 稔(新潟県)

- 195 つるバラの今を盛りに咲き競う心を洗うるわしの時 高橋登志子(新潟県)
- 196 妻逝きて十たびの夏ぞ西方に信貴きはやかに見ゆる日多し 野木宗信(奈良県)
- 197 わが行きは生きの命の拙くて拙きままに招かれゆくらむ 阿部誠文(福岡県)
- 198 今限り夏のひざしに負けぬようなくひぐらしのぬけがら残り 大橋絵代(千葉県)
- 199 優雅なる藤の花愛で御抹茶を戴きながら琴の音を聴く 西山知子(岡山県)
- 200 薪取る手も凍えしとラーゲルの苦役語りし父のシベリア 関原幸子(東京都)
- 201 手のひらに煙管の火種ころがすを飽かず見詰めき小昼あぜ道 高橋卓二(新潟県)
- 202 峠より眺むる海に国後島の淡き領土をじつと見つめる 山田良男(埼玉県)
- 203 都草憧れいたる若き日も遠くになりて鄙に根づけり 合田浩子(茨城県)
- 204 ギラギラと歪む港へ続く道ロードバイクが風をはこびぬ 竹田満美子(静岡県)
- 205 朝子読みし翻訳の書多く有りカバの背の色文字のくすみて 中田妙子(東京都)
- 206 ツクバネの実を取り空へ投げたればくるくる回るプロペラのように 早坂保文(宮城県)
- 207 三陸の旅終えくつろぐテレビから悪夢ふたたび九州豪雨 岩崎令子(大阪府)
- 208 八十でマラソン大会でているが関門規制でヒヤヒヤ走ってる 新井 賢(埼玉県)

- 209 絡み合ふ風合戦に若き日の糸に伝はる力俣べり 夏井寛治(新潟県)
- 210 初めての老人会に出席のあたりに誰も知る人のなき 坂元正憲(東京都)

フォトイック

- 211 大衆は背丸父子に期待する 松田重信(埼玉県)
- 212 母の子よひまわり見詰め道を説く 千代田栄次(東京都)
- 213 兄ちゃんとひまわり迷路やとと抜け 石原 岳(群馬県)
- 214 朝早し二人だけにあるひまわり 富樫和子(山形県)
- 215 ひまわりがこんなに背中が笑つてる 橋本良子(埼玉県)
- 216 自由こそ天使の命自由こそ 五十嵐睦博(新潟県)
- 217 向日葵や洋画に涙す角帽に 津田忠彦(岡山県)
- 218 ひまわりも心配顔で耳澄ます 小石澤勝子(東京都)
- 219 ひまわりや忘れられない初恋です 星 一子(神奈川県)
- 220 姉弟やひまわり畑に夢語る 井原穂子(東京都)
- 221 炎天に真面目に咲いている二人 久本にい地(岡山県)

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：中川三郎さん)



- 222 お見合いかどの娘がほしい楽しみね 佐伯セツ子(香川県)
- 223 ひまわりやゲームに夢中僕と君 山崎吉晴(群馬県)
- 224 父子共にお花島の秘めごとお 阿部幸子(宮城県)
- 225 ひまわりの眩き朝の来てゐたり 小澤円梨(静岡県)
- 226 朝散歩休んでいこか父子の背な 小山恵美子(大阪府)
- 227 傷心を向日葵揃ひて慰むる 寺内 信(埼玉県)
- 228 向日葵やゴッホを知らぬ兄おとうと 大阿久雅子(埼玉県)
- 229 青春は大向日葵の畑の中 岩村 昇(神奈川県)
- 230 百万本向日葵を見る親子かな 水落重武(新潟県)
- 231 「ひまわり」そは色あせぬエンディング 島田實貴男(群馬県)
- 232 ひまわりも食べられさうな疎開の日 高崎登喜子(東京都)
- 233 笑つてるそんなにはくたち愛かなあ 阿部澄江(宮城県)
- 234 ひまわりに見つめられると照れるな あ 阿部徳夫(宮城県)
- 235 叱られておなかつかして男の子 平山千江(岩手県)
- 236 ひまわりのソフィア・ローレン愛しきよし 福岡 悟(東京都)
- 237 向日葵もいつも見ている君のこと 近藤薫也(千葉県)
- 238 輪禍に逝くひまわりの笑み絶やさず に 居原田連星(大阪府)
- 239 逝く夏を惜しむ兄弟まあるい背 濱崎祥子(鹿児島県)
- 240 数百のひまわり眺め何思う 松前邦広(千葉県)
- 241 少年の未来を語る夏休 三津木俊幸(千葉県)
- 242 一斉に眩しすぎるよ向日葵が 佐野和彦(静岡県)
- 243 雲行きもめげず向日葵笑ひすぎ 片山茂子(埼玉県)
- 244 向日葵の意気軒昂の羨まし 天野輝子(東京都)
- 245 母と娘と花にみとれてゆめ無限 渡部美代子(山形県)
- 246 数千のひまわり会話が二人 鈴木義雄(福島県)
- 247 向日葵の畑の迷路遠すぎて 田中豊恵(新潟県)
- 248 満開のひまわり畑座すふたり 宇都木安子(東京都)
- 249 ひまわりや親に反抗したものもの 佐藤儀雄(北海道)
- 250 十字架がならびて霧にふかれけり 安部 哲(新潟県)
- 251 丹精の向日葵を見る親子かな 神 一男(静岡県)
- 252 元気だせ向きあう花のみんな言う 奥那於子(大阪府)
- 253 日向きにおはようと云う親子連 青木日出男(群馬県)
- 254 ひまわりやデイケアの窓開け放ち 堀木和子(大阪府)
- 255 ひまわりの数ほど文句しかられて 有田裕子(北海道)
- 256 ひまわりに染りて語る姉と君 黒岩正子(埼玉県)
- 257 かあさんがおいらのことで泣いてい 北野耕兵(千葉県)
- 258 満開のひまわり畠ひと休み 堅田秀子(東京都)
- 259 ひまわりやおとぎの国の玉手箱 齊藤安弘(神奈川県)
- 260 おじさんとひまわり畑みまわりだ 高橋登志子(新潟県)
- 261 あくせくと今日も暮れけり夏に入る 井田由利子(宮城県)
- 262 ロマンスを耳そば立てるひぐるま草 藤井春三(埼玉県)
- 263 ひまわりに突き上げられるいたずら子 長峰正晴(千葉県)
- 264 花の園二人で眺め恋生る 清まさじ(静岡県)
- 265 観客が大笑いするコント芸 長谷川庄二郎(千葉県)
- 266 弁当を今日持つてくれば良かったが 岩崎政弘(岡山県)
- 267 コンクール今日もひまわり優勝だ 萬濃その子(神奈川県)
- 268 演習かそれとも野焼うるさいぞ 鏡たか子(山形県)
- 269 向日葵の謳歌眩しき我が心 菅原キイ子(宮城県)
- 270 花見のち油になるか肥料にか 田中こづえ(北海道)
- 271 豊かなるひまわり畠癒されし 柳澤京子(宮城県)
- 272 向日葵の迷路に空の輝けり 関原幸子(東京都)
- 273 漫才に五千のひまわり大爆笑 岡村君枝(茨城県)
- 274 向日葵の花を数ふる親子かな 山田楽山(埼玉県)
- 275 ひまわりの大河に思案兄弟 梶 鴻風(北海道)
- 276 男子たち耳をすますか叱られて おのこ 合田浩子(茨城県)
- 277 向日葵になぐさめられし童子かな 有島和子(東京都)
- 278 テレビアサヒ「ひまわりの郷」みくつ けた 仁藤ひろじ(埼玉県)
- 279 ひまわりに元気もらつてさあ帰ろ 小林恵子(大阪府)
- 280 向日葵へじつと隠れるかくれん坊 本庄準也(埼玉県)
- 281 向日葵や幼き日々を語り合ふ 中野勝子(鹿児島県)
- 282 向日葵や語らひ尽さず父と子と 村山徳英(埼玉県)
- 283 ひまわりの夕べそろそろ帰ろうか 大窪美代子(大阪府)
- 284 ひまわりの笑顔こそつて背を押す 日名子春実(群馬県)

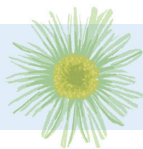
- 285 向日葵が空に向かつて平和論 小林榮子(埼玉県)
- 286 ひまわりの大合唱に聞きほれる 橋本世紀男(東京都)
- 287 みなこちらむく花たちを兄弟と 浅海和代(東京都)
- 288 昼餉の畑り向日葵畑の子に立ちぬ 鈴木零夫(千葉県)
- 289 どうするの今も昔も同じ夢 菅井文男(新潟県)
- 290 日暮れ前遊び疲れてひと休み 和崎治人(山口県)
- 291 親と子の秘密ひまわり聴いている 岩崎令子(大阪府)
- 292 たくさんの向日葵の目に恥ずかしい 山中たい子(大阪府)
- 293 肩に負ふ先の人生向日葵畑 安田芳江(茨城県)
- 294 向日葵や富士を背にしてにこにこ 杉浦俊雄(静岡県)
- 295 気骨とも大向日葵の背中とも 椋本望生(大阪府)
- 296 あひしらひスマホと君とヒマワリと 九法活恵(埼玉県)

俳句・川柳募集!!



(写真提供：伊丹三樹彦さん)

右の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております!



「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎短歌部門

11 八月のあの日あの時火に溶けし友
は被爆地の一草の根

寒川靖子(香川県)

・戦後生まれの政治家が多く、この歌のような悲惨さを知らず論じている。憂うばかりである 黒澤正行(福島県)
・八月六日式典の水を朝三時に汲みに行っていきます。被爆者のために。寒川さんの友人のためにも 井上氣海(広島県)
・下の句の表現がよい。原爆に逝きし友を思いやる気持ちをよくうたっている 山田良男(埼玉県)・広島
長崎、沖縄いつもその日は手をあわせています。戦争反対原発反対!! 合田浩子(茨城県)・「一草の根」に作者の友への思いが凝縮されている 早坂保文(宮城県)・再び起こってはならない悲劇。次世代に伝えたい 岩崎令子(大阪府) ほか

6 子が遊びまた孫遊ぶ公園の古いブ
ランコ早春の風

北澤実夫(東京都)

・団地の公園か。子供と孫の成長を見守り続けた古いブランコに愛着がわく 桑原謙一(群馬県)・さっと情景が想い描けます。人柄の善さも感じられる作品です 荻田忠征(東京都)・平和な時の流れ、幸せな日常が伝わってきます 橋本世紀男(東京都)・近くの公園を散策中ふつとブランコが目、お子さんやお孫さんと遊びし頃が甦える(今や成長されたお孫さん達の姿が伺える) 坂元正憲(東京都)

◎川柳部門

42 下がるまで何度かはかる血圧計

山口静一(東京都)

・下がるまで何回も深呼吸するといいかも 原 崇雄(埼玉県)・気持ちよくなる 西條公雄(埼玉県)・よくあること。体のせいか計器の不具合か 田中 昶(鳥取県)・深呼吸して三度はかると正常にもどるので安心する。この方も私と同じだと思います 大久保アヤ子(東京都)・独り居の私もですよ。のぞき読みしている叔母も「おれみたい」と賛同者一人ふえて 菅原キイ子(宮城県)・身につまされる 石尾曠師朗(東京都)・深呼吸しては下がるまではかっている家内の姿を思い浮かべて納得です 和崎治人(山口県)

56 助手席に助手などしない妻が乗る

目黒豊光(福島県)

・助手席の奥様、指図ばかりして口喧しいのではないですか。ご夫婦の面白さが伺えます 長谷川庄二郎(千葉県)・耳が痛い 中林恵子(大阪府) ほか

◎俳句部門

164 老いてなほ春眠と云う若さあり

鏡たか子(山形県)

・老いと若さを取り持つ春眠に共感 有坂馨園(福島県)・老いてくると睡眠は三、四時間で良いと。それ以上は眠れないのが普通ですが八十歳になって七、八時間は寝られるという私は病気なのか大いに同感している 浦橋克行(兵庫県)・春眠イコール若さと言いつける「若さ」がステキ 小林七重(新潟県)・春眠を若さにかえた前向きな

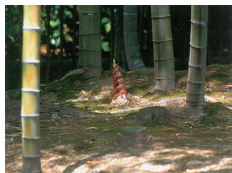
姿勢に同感です 岩村 昇(神奈川県)・眠るといふことはとてもエネルギーのいる事です。若者のように「春眠」おおいに楽しもうではありませんか 阿部徳夫(宮城県)・春眠を若さととらえた感性 井田由利子(宮城県)・老いの中に前向きに生きようとする若さと寛ぎが詠まれている 邑橋節夫(兵庫県)

71 度忘れと何気なく言ふ木瓜の花

堅田秀子(東京都)

・この歳になると誰もが実感する。老いるとは悲しいね 山崎吉晴(群馬県)・度忘れ いろいろの意味を込めた語です。木瓜の花も又妙です 寺内 侖(埼玉県)・何となく自分があてはまる様な気がします 檜山とり子(東京都)・つきすぎるかもしれないがおもしろい 緑川禎男(埼玉県)・「度忘れ」と何気なく言う重大な習慣性と「木瓜の花」取り合わせに緊張感は見える 田野井一夫(栃木県)・度忘れと言えないくらい良く忘れる昨日今日 服部八重子(東京都)

◎フォトインク



205 此処だけにある風の音竹の秋

高崎登喜子(東京都)

・実感が上手にまとめられている。リズム感がよい 大窪美代子(大阪府)・

「竹秋の風音」って、きつと、乾いた素肌の感触なんでしょうね。お人柄をも感じます 鈴木岑夫(千葉県)

216 竹の子の三日見ぬ間の伸び盛り

大阿久雅子(埼玉県)

・竹の子の日毎に伸びる様子がよく解る 岡村君枝(茨城県)・「子供の成長の早さ」が今二才児に戻った妻を介護している自分の目に痛く刺る 仁藤ひろじ(埼玉県)

◎他にも

10 正造の御霊弔ふ鐘の音か渡良瀬河畔の古寺より響く

山田良男(埼玉県)

20 水の上に枝を差し伸べ嬬やかな千鳥ヶ淵の桜煙めく

関原幸子(東京都)

29 憂きことの多きこの世にひとときの癒し求めて藤の花愛つ

岩崎令子(大阪府)

77 鎌を研ぐ卒寿の義姉に花菜風

中嶋清子(佐賀県)

89 一刀に断てぬ煩惱朧月

川口 襄(埼玉県)

148 床の間に飾りて美しきランドセル

井上氣海(広島県)

153 人は皆惜しみ惜しまれ散る桜

吉村充治(埼玉県)

170 一礼し交差点渡る新入児

金子範子(高知県)

194 てのひらに乗って登校かたつむり

高垣勝代(大阪府)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします!

Q 前回のアンケート
夏の終わりを感ずる
風物詩といえは
何ですか？

★秋の虫、蛸など

- ・コオロギの声を聞いた時 小石澤勝子(東京都)
- ・夜道を歩く時、こおろぎの声に秋近しを感じる 中田文子(大阪府)
- ・赤トンボの乱舞 坪田勝秀(鹿児島県)
- ・文化の日が近くなり赤とんぼが見えなくなった頃 宇田川正雄(埼玉県)
- ・木槿が枝一ぱい広げて咲き、蟬が休み乍ら鳴くとき 檜山とり子(東京都)
- ・蟬の脱殻を道端や階段の踊り場で見たとき 高崎登喜子(東京都)
- ・草むらのスイッチョ 阿部徳夫(宮城県)
- ・きりぎりすの鳴声 鳥取祥子(千葉県)
- ・松虫が鳴き出したんだん虫の鳴き声にぎやかに 大久保アヤ子(東京都)
- ・あんなに蟬の声が騒がしかったのにやがてほとんど聞こえなくなったこと 浅野信廣(宮城県)
- ・蛸の鳴き声。未知の国に誘われるような何とも言えない気持ちになります 鈴木蝶次(宮城県)
- ・ひぐらしのぬけがらとホタル 大橋絵代(千葉県)ほか



★鳥

- ・いつの間にか郭公やほととぎすの鳴き声が消え尾花が咲き出す 黒澤正行(福島県)
- ・老鷲の鳴き声 阿部幸子(宮城県)

★海、プール

- ・九月に入るとクラゲ出現。刺されて痛い目にあう。ああ夏が終わった 濱崎祥子(鹿児島県)
- ・海水浴客のいなくなった浜 岩田 信(神奈川県)
- ・八月の下旬に打ち寄せる、土用波 湯浅暉子(石川県)
- ・お盆に帰省した時の故郷の海の色 一瀬正子(埼玉県)
- ・海の家を閉める時 中林恵子(大阪府)
- ・海の色が夏色から初秋の色に変わって行く時ですね！ 中川義彦(新潟県)
- ・浜辺の白砂が熱さを感じなくなったとき 菅井文男(新潟県)
- ・プールでの秋風 原 崇雄(埼玉県)
- ・プール納め。九月上旬小学校では校内水泳大会を開きます 久本にい地(岡山県)
- ・プールの賑わいがなくなった時 古川正栄(千葉県)ほか

★花・植物

- ・枯れたまま立っている立葵の姿 高橋卓二(新潟県)
- ・秋桜が咲き、狭庭について彼岸花が出て九月十九日の子規の命日が近づくと 井原毬子(東京都)
- ・コスモス、キクが咲きはじめると秋が来るなあと思います 杉村美保子(岩手県)



- ・朝顔の顔がしほむ頃 居原田連星(大阪府)
- ・露草。私は青い花が好き、身近な所に咲く可憐な青い花に秋の訪れを感じます 関山恵一(神奈川県)
- ・コスモス、マリーゴールドが夕方の風にゆれている情景 井田由利子(宮城県)
- ・まんじゅしゃげが咲き始めた頃 西山知子(岡山県)
- ・散りはじめの百日紅の花。松葉牡丹の花が小さく 石尾曠師朗(東京都)
- ・さるすべりの群生の花 近藤富夫(東京都)
- ・頭をたれたひまわりの花 岩崎令子(大阪府)
- ・山の沼地に見られるワタスゲ！ 小島岳青(新潟県)
- ・蔓草のからみどころなく風にゆれるさま 三津木俊幸(千葉県)
- ・すすきの穂先を見つけたとき 菅原キイ子(宮城県)ほか

★稲

- ・稲穂が実をいっぱいたくわえる凜とした田園風景 大鳥居牧子(東京都)
- ・稲が少し黄ばむ 湯浅芳郎(岡山県)
- ・稲刈り、豊年祭 野木宗信(奈良県)ほか

★食べ物

- ・茄子の皮に錆が出てきた時 平山千江(岩手県)
- ・トマト 重原 昇(新潟県)
- ・西瓜の食いおさめ 五十嵐陸博(新潟県)
- ・昔、井戸につるした西瓜の味 小笠原紗恵子(神奈川県)

★花火

- ・花火大会が終わるとしみじみ夏の終りを感じます 富樫和子(山形県)
- ・八月終りに祭、そして花火があるのでそれが終ると感じます 金子よし子(新潟県)
- ・腹の底にひびく音、ドドン、次々と上る花火。明日から秋だなと思う 金子範子(高知県)
- ・「遠花火」：ピルの隙間から見る花火の切なさ：侘しくも夏の暮れ 関本 守(新潟県)
- ・夕涼みの家庭の線香花火 木村 舳(山形県)ほか

★風

- ・朝夕などふと涼風を感じた時 細川光子(栃木県)
- ・ふと頬に触れる風 寒川靖子(香川県)
- ・四方の窓から入る涼風を肌でかんじ た時 黒岩正子(埼玉県)
- ・秋風にたなびく雲の絶え間よりもえ出づる月の影のさやけさ 長谷川 稔(新潟県)ほか

★雲

- ・空に浮かぶ雲の形がうろこ雲やすじ雲に変ってゆくととき 桑原謙一(群馬県)
- ・入道雲から秋の雲に変ったとき 大阿久雅子(埼玉県)
- ・空一面に小さなるろこ雲が浮かんだ時 奥那於子(大阪府)
- ・雲の変化 鯛雲等に秋を感じる 大窪美代子(大阪府)ほか

★祭り

- ・お祭りの笛・大鼓の練習を聞いた時 木村洋一(新潟県)

・秋祭りにそなえて夜毎練習する太鼓の音が聞こえ始めたとき
市毛信子(東京都)

・夏祭りの八月十五日に夜、市の花火大会を見学して、次の日から夏の終りを感じる
松尾正一(岩手県)

・遠くに聞こえる祭の笛の音：送られてくる夕風：
堅田秀子(東京都)
・自治会主催の地藏盆、子供達の夏休みもこの日までと毎年夏の終わりを感じてきました
中山日出子(大阪府)ほか

★送火
・お盆の送り火が済むと
西條公雄(埼玉県)

・京都東山の大火の火を見ると夏の終りを感じる
山田良男(埼玉県)ほか

★風鈴



・風鈴の音がすこしずつきけなくなる
中嶋清子(佐賀県)
・軒下の風鈴。初秋の風を感じる頃です
小澤円梨(静岡県)
・風鈴の涼しき音色をさびしく感じる時
松前邦広(千葉県)

★台風

・台風の発生情報
津布久信雄(東京都)
・台風が来るといふ、秋が来る前と思う
浅海和代(東京都)

★甲子園

・夏の甲子園(高校野球)が終わると、もう夏も終わりかと思っている
石原 岳(群馬県)
・甲子園の高校野球、決勝戦のあと優勝校が球場を一周するとき
齊藤安弘(神奈川県)

★終戦日

・終戦日である
井上静夫(栃木県)
・原爆忌(広島県)
山田富朗(埼玉県)

★服装

・更衣は夏の季題だが脱いだ上着が必要になった時
大橋恒次(新潟県)
・半袖シャツ等をしまうとき
水落重次(新潟県)

・店のマネキンに秋物をきせ替えた時
岡村君枝(茨城県)

★その他

・遠蛙
林 克(福島県)
・流灯会
有坂馨園(福島県)
・運動会。現在は春に行う所も多いが
濱田イサオ(福岡県)
：
・富士山の山じまい
土屋喜雄(山梨県)

・自分の日焼けした腕や顔を見る時
杉原明子(静岡県)

・敷物を花ゴザからジュータンに変えた時
松尾らん(東京都)
・新潟のおいしい枝豆の豆の粒が小さくなってきたと感じる時
若月理依子(新潟県)

・八月末のノサップ岬マラソンが終了した時
早坂紘司(北海道)
・昔は子供達が宿題を始めたとき、今は二人で熱帯が欲しくなったとき
近藤薫也(千葉県)

・穴感い
佐野和彦(静岡県)
・晩夏光の俳句が多くなった時、残暑見舞を頂いた時
片山茂子(埼玉県)
・音もなく光るだけの稲妻
田中豊恵(新潟県)

・夏ばて。ようやく涼しさを元氣をもどして来る様子に秋の近さを感じる
夏井寛治(新潟県)

・はげかけたベディキュア
吉里ひとみ(東京都)

・二学期が始まる時
長峰正晴(千葉県)
・燕が軒先から姿を消して淋しくなる時
本庄準也(埼玉県)

・自然の風景が全体的に白っぽく感じる時
村山徳英(埼玉県)
・クリーニングに出す時
長谷川庄二郎(千葉県)

・同窓会、毎年八月の最後の土曜日集まります
合田浩子(茨城県)
・日の暮れるのが早くなったとき
目黒豊光(福島県)

・日に日に明ける時間が遅くなっていくこと
椋本望生(大阪府)

・チョコレートを冷蔵庫から出してとけない状態になったら
白戸麻奈(東京都)

・伸び切った諸々の木を整えに剪定師の方が毎年来て下さる
仁藤ひろじ(埼玉県)

・心の友に「残暑みまい」の短信を書く時
鈴木岑夫(千葉県)
・陽よけ布や簾を片づけキャンプ用品を収納する
和崎治人(山口県)

・夜空の月が美しく見えて来る頃
青木日出男(群馬県)
・庭のブルーベリー最後の収穫
木村誠一(神奈川県)

・サマーバーゲンセールで夏の終わりを感ずる
沖 惇子(大阪府)



虫の声に夏の終わりを感ずるといふ声が多数！現在『新潟の秋に鳴く虫』という本を制作中で、46年間にわたり中学、高校、大学で教職に就いていた医学博士の長島義介さんに虫の生態についてご執筆いただきました。

「鳴く虫の声と季節の移ろい」 長島義介さん

つるべ落としの夕陽が佐渡の島に沈むと新潟砂丘は急に冷たくなる。どこからともなく草むらから、虫の鳴く声が聞こえてくる。リン・リン、チンチロリンと爽やかに響いてくる。虫は小鳥と違って喉では鳴かない。虫のマンガを見ると「コオロギがギター(弦楽器)を弾いている姿が見られるが、これは誤りである。虫の鳴く音は前翅の左右2枚のつけ根にある発音器に仕組みがあり、一方の翅に鎌形、もう一方の翅に「こすり」器があって、その両翅を左右にこすり合わせ、翅脈の振動を膜の振動にかえて発音する膜鳴楽器だからである。また翅の形状(大きさ、湾曲など)によって空気柱が出来、その周波数に共振した振動数の波数だけ音としてるのである。鳴く虫の多くはオスが鳴く場合が多い。

ではなぜ虫たちは鳴くのであろう。鳴く虫は草や木の中に生きている。たとえば鈴虫。固有の振動数でメスがオスに聞こえていると居場所を知らせるために大きな声で鳴くのが「叫び鳴き」、メスが近づいてくると優しい声(セレーナ)に変わるのが「誘い鳴き」である。そしてオス同士がメスをめぐる競い合っなのが「競い鳴き」である。即ち虫の鳴き声は「コミュニケーション(信号)」なのである。良寛様は虫の鳴く声を聞いて「わが待ちし秋は来ぬらしこのタバ草むらごと虫の声する」と初秋の訪れを感じられたようです。

6-7月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！皆様からのメッセージが、私どもスタッフの励みです。率直な感想や親身なアドバイス、いつもありがとうございます。皆様のお声で、情報誌「喜怒哀楽」がつくられていきます。

- ・開けた瞬間、きれい爽やかと思ったのは、みどりの多い表紙から。6月らしい印象を受けました。
- ・ここに響く言葉。若松英輔氏「悲しみの秘義」に改めて感銘を受けました。
- ・「菜根譚」の人になるにはまだまだ時間が必要ですね。次号が待ち遠しい。
- ・「新発田かりん会」これくらいの人数の歌会だと一人あたりの発言量も多くなり、ここでみられるように厳しい相互批正が期待され、刺激的で研修の実が挙るだろうと羨ましく思いました。
- ・谷知様の句集です。とても自然体で素敵に抄出の御句拝見しました。御心の平らな御方ですね。
- ・フォトイックも毎回皆さんの発想に感心致します。川柳はまた、フムフムとうなずいたり笑ったり楽しませて戴いています。
- ・詠み人スクランブル「夏だなあ！と思う瞬間」それぞれの育った土地柄が出て楽しく拝読致しました。
- ・新潟都屋の店長山口さんの記事。夏のお酒のおいしさが伝わってきます。山北の岩ガキ食べてみたいです！
- ・新潟ぶらり 米百俵の記事。自分は教育学が専攻なので、小林虎三郎の米百俵に関する考え方に感動。立派な教育学説だ！
- ・「出版文化と越後人2」前号に引き続き楽しく拝読しました。
- ・食楽句楽のすすめ「メロンの自縛を解く」は、まさに言い得て妙の言葉がピッタリのエッセイで大いに感心しました。
- ・「名古屋の雨」を通読して日頃の忙しさを忘れさせてくれるさらりとした気分になりました。

※今号へのお声も、ぜひお寄せください！

新潟ぶらり

◆小林病翁の碑—教育と反戦

病翁とは、「米百俵」において教育第一主義を主張した小林虎三郎（二八二―一八七七）のことである。

蒼紫神社（新潟県長岡市）の参道脇に虎三郎の碑がある。碑文には「学校を敗残窮餓の中に興し、以て人材を養成し、長岡をして今日の盛有らしむ」とあり、長岡の今日を築いた功績が記されている。

同じ参道脇に戊辰刀隊戦没諸士の碣銘がある。「戊辰の変、我が藩の権臣迷錯して…」の撰文は虎三郎によるもの。稲川明雄氏は次のように読み解いている。「長岡藩軍事総督の河合継之助の決断が、戊辰戦争の災禍を我が長岡城下にもたらした。（中略）そのために、城と城下町は焼野原となり、国家（藩）も廢墟（失なう）と化してしまった（後略）」*1。

戦うべきではないといひ続けた虎三郎。実は、山本有三が「米百俵」を書いた理由もここにある。そもそも有三は、星野慎一（ドイツ文学者、長岡出身）から河合継之助のことを書いてほしいと頼まれていた。ところが有三は「河合継之助、いろいろ読んでみたが、戦争に踏み切ったところがどうもひっかかる。戦争って、結

局みんなをひどい目にあわすことだからな。（中略）それより、あの食えないから学校を建てたという話、いい話だね、あれをやってみよう」と言ったという。*2

こうして生まれた「米百俵」は一九四三年に五万部を発行するも、反戦戯曲であると弾圧に遭い自主回収、絶版に。長岡のまちも一九四五年八月、空襲によって廢墟となってしまう。

しかし一九七五年、長岡市によって「米百俵 小林虎三郎の思想」が復刻出版された。「米百俵」初版から約三十年後、国漢学校開校からは一〇五年後のことである。（菅真理子）

*1 稲川明雄（2008）「漢詩と著作」『米百俵—その先の未来へ—』財団法人長岡市米百俵財団 p.30

*2 下田三智夫（2008）「戯曲『米・百俵』が生まれるまで」同右 p.40



虎三郎の人生は病と不遇の連続だったが、学問を通じて社会に貢献するという思いをもち、実行しつづけた。

にいがた
文化の記憶館
便り(15)

漂泊の俳人 井上井月

秋岡 啓子

幕末から明治という激動の時代に活動した井上井月(1822~1887年)という俳人がいます。松尾芭蕉に憧れて、草庵すら持たず、生涯漂泊生活の中で句作を続けました。没後、芥川龍之介や種田山頭火らにその生き方と才能を評価され、つげ義春の漫画「無能の人」の題材にもなっています。

井月は現在の新潟県長岡市で生まれたといわれています。生家は刀研ぎを生業とする武家だったようです。その頃を思わせる句に「雪車そりに乗りしこともありしを笹粽ささもち」などがあります。17、8歳のころ故郷を出て、江戸や京都で和漢の学問を修め、全国を放浪(北は秋田県の象潟、西は兵庫県の明石まで歩いたことが確認されています)。37歳頃に信州・伊那谷へたどりつき、後半生をこの地域で過ごしました。

長野県の南東部にある伊那谷は、3000メートル級の山々からなる南アルプスと中央アルプスに抱かれた自然豊かな盆地です。この地域には、当時、井月が書いた句などが約1800残されています。財産を持たなかった井月は、家々をめぐるには食事や宿のもてなしを受けるかわりに、請われるままに作品を残しました。現在、伊那には井月句碑が多くあり、そのいくつかを紹介します。

降ふるとまで人には見せて花ぐもり
菜の花に遠く見ゆるや山の雪
落栗おちくりの座を定めるや窪溜くぼぼり
何処どこやらに雀たけの声きく霞かな

明治中頃、俳句の近代化を提唱した正岡子規は、近世の俳句をありきたりで言葉遊びに偏った「月並俳句」だとして批判しました。こうした風潮の中で、芭蕉に私淑し、いわば自然を写生した井月の句は高く評価され、芥川に「井月は時代に曳きずられながらも古俳諧の大道は忘れなかった」と称賛されました。井月がいかに芭蕉を敬愛していたかは「我道わがみちの神とも拝め翁おきなの日」という句からもうかがえます(「翁の日」は芭蕉翁の命日)。

井月は自分の生い立ちについてほとんど人に話さなかったため、その人生は謎に包まれています。幕末の戊辰戦争で、故郷である長岡藩は幕府軍側につき、一方で伊那の高遠藩は新政府軍として長岡に出兵しました。こうした情勢からも、井月は複雑な心境であったと推測されます。同じく越後出身で、無欲・無所有の生活を送り、歌と書で名を残した禅僧良寛がありますが、良寛研究家としても知られる相馬御風は、昭和に入って井月の存在を知り、「越後人の放浪性と土着性」という随筆の中で、越後人としての両者の共通点に思いを巡らせています。



▲下鳥空谷筆
《井月の面影》



◀企画展示「井上井月展」
の展示風景一部

【企画展示情報】

「漂泊の俳人 井上井月」

会期: 7月7日(金)~9月24日(日)

休館日: 月曜日(9月18日は開館)、9月19日(火)

「食楽句楽のすすめ」の執筆者・岩田桂さんは、岐阜県生まれ、新潟市在住の元大手企業の企画マン。

畑を耕し、俳句の主宰をつとめ「食楽句楽」を実践しつつ

人生のセカンドステージを満喫されています。

食と俳句とのコラボレーション、当意即妙のエッセイをご賞味ください。

冷奴のしみじみ

岩田 桂

冷奴(夏の季語)に関しては結構うるさい人が多い。この奴(やつこ)は味が濃いか、豆の味がしなやか、硬いか、遣伝子操作された豆とか、いろいろとうるさく蘊蓄を並べます。

薬味に関してもあれこれ、醤油にも一言注文をつけたがります。しかもいづれの蘊蓄も、いわば禅問答となるのが特徴です。

じゃあ、「それほど言うんだったら、冷奴の本道を原稿用紙一枚にまとめてみろよ」と言う、さつさとどこかに消えていなくなります。そこが不思議なのです。先ほどの御託がウソのように面前から消える。それほど冷奴道の本質を語るのには難しいのです。

しかしいざ食べる場合は、そんな蘊蓄など何処かに消えて、「奴さん、奴さん、今日のあなたは何処まで」などと言いながら箸を取ります。

とにかく素朴なのがいい。どちらか、醤油さえあれば十分だ。ネギのみじん切りにおろしショウウが乗っければ大満足だし、削りカツオでもふりかければ最高だ。およそ料理ともいえないこの素朴な絶品は、まさに和食の日常食の王様です。

しかも「結構なお手前でした、この器は有田の柿右衛門でございませぬか？」などと、挨拶を述べる必要など一切ありません。それが冷奴の庶民的な、野点風食べ方なのです。

冷奴食べる亡者の揃ひけり

さらに不意の客には、とっさの馳走として、「とりあえずの冷奴」と活躍します。これは客をしばらく黙らす意味から、「黙らしメニュー」と呼びます。この機能はありがたい。

だから冷奴がいかに早く出てくるかで、客に対する好意度が推し量られると信じられています。なかなか出てこない場合は「ああ、オレは歓迎さ

れていないんだ！」と、己の未熟さ、世間の冷たさを感じとらねばなりません。

また一般では、風呂上りのお父さんにも、この冷奴はありがたい。キンキンに冷えたビールを「いざ、イザ！」と、言いながらグビグビやる場合は、まずこの冷奴が枝豆があれば事足りません。

ビールを一口飲んで、冷奴を箸で崩しにかかります。食べやすいように冷奴を四等分に箸で切り、その一角をおもむろに口に運びます。大方のお父さんは、その崩した一角に舌を突き出して、口で迎えに行きます。「おっと」と言いながら、冷奴を迎えに行くわけです。

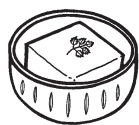
おっとと手を添へて食ふ冷奴

この一連の動作がスムーズだと、そのお父さんの健康状態に対して、冷奴業界の「健康に異常なし」の太鼓判が押されます。もちろんこれは自己申請制です。このお父さんは「豆じゃのう」となるわけです。

さて豆腐の美味い所といえば、やはり京都回りという声があります。関西では特に絹豆腐が好まれ、淡口醤油を少し垂らして、茗荷やネギの薬味をのせます。

「この豆腐は京都の嵯峨野名物ですよ」等と言いながら、ビールのあてに出せばもう立派な「冷奴会席」の出来上がりです。セット会席で五千円は稼げるメニューです(本当)。

さらに冷奴に欠かせないのが水です。南禅寺や嵯峨野の割烹料理店などは、冷奴の水を自慢にしている処もあります。名水百選の「××の水」に浸した冷奴だといわれると、おもわず肩と箸先に力が入ります。



「六甲の水冷奴」や、「アルプスの天然水冷奴」なんていい感じですよ。お大師様縁の「どっこん水」仕立ての冷奴ならば、「ウン、これだ、これが豆腐の味なんだよなあ！」などと口走るに違いありません。

また通の人たちは天然塩を少し舐めて奴を食べ

ます。これを「潮仕立て」と言います(言わないか)。

冷奴それも赤穂の塩添へて

また豆腐には絹と木綿がありますが、歯ごたえはやはり木綿に限ります。関東ではこの木綿が好まれます。しかも噛みながら食べると、豆のほのかな甘さが口中に広がってきます。その切ないほどの甘さと、青臭い匂いが関東人好みなのです。

そして冷奴は人心を沈め、しかも清めてくれます。激しいビジネス競争に疲れたら、愚痴のこぼせる女将の店で、この冷奴でしみじみと一杯やるのも、大人の嗜みと言うものです。幾度となく冷奴に救われた男たちが多いはずですよ。

「なんかあの、いじけた感じが、淋しく、暗く、いいんだ、あれで、どーせあれは、あれで良かったんだよなあ、ちくしょう……」などと冷奴に心の内を暴露しては、また明日へと闘志を取り戻すわけです。

もちろん男だけではなく、女性にも冷奴は付き合ってくれます。特に恋に破れた女性の悲しみを聞いてくれるのは、他でもなくこの冷奴さんです。そこのお嬢さん、身に覚えが御ありでしょ……。

これを「孤高の冷奴」と言います。この一丁の冷奴には、何もかも削ぎ取った「素」としてのボクらの、日本文化と精神が宿っています。「魂」と言っても言い過ぎではないかな。

おっとと、さつそこの奥の深い冷奴に、今夜もお世話になろうかな……。

そう言えば新婚さんの冷奴ってのもいいものですよ。「おい、口あけて、おっとと……」などと箸で相手に食べさせる光景です。そしてお互いにくこりする。

そのあなたにもこんな経験が御ありでしょ。そうだよなあ。参ったなあ、冷奴さんがそんな熱々に貢献するなんて。まあ、いいか、夫婦円満なれば妬みも喧嘩もなしてわけですからね。たかが冷奴、されど冷奴です。

新婚の箸で差し出す冷奴

漂泊の俳人 井上井月展

13Pでも紹介されている「井上井月展」のチラシを同封しました。9月24日(日)までの開催となります。ぜひ足をお運びください。



●●● 滋味しみじみ

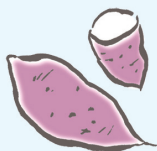
おやつ

鳥取祥子

昭和23年春、わが家は両親と私たち夫婦と、生まれて3か月の長女の5人で住んでいた。ある日、知人より、進駐軍の奥さんに一部屋貸してほしいと頼み込まれ、一緒に住むことになった。進駐軍の奥さんは、とても子供好きで、長女を自分の子供のように可愛がってくれた。

子供がよちよち歩けるようになると、ジープに乗せて名所旧跡の見物に連れてゆく。そして帰るときは、必ずお土産にナビスコのクッキーを持たせてくれた。クッキーなんか見たこともなかった時代。何しろサラリーマンの月給が1万円か2万円くらいの時代に、高価なお菓子をいただいて恐縮したものだ。

ある日、奥さんは、当時1本70円もしたバナナを娘に買い与えて、食べてる娘に向かって「それはなあに」と、聞いている。娘は大きな声で「芋!」。



第24回 夢二忌俳句大会

日時：平成29年9月1日(金) 午前9時受付開始・正午 投句締切(囁目3句)

会場：群馬県伊香保 ホテル天坊

会費：3,000円

◎問い合わせ／夢二忌俳句大会実行委員会

〒377-0102 群馬県渋川市伊香保町伊香保397-1

TEL 0279-20-3555

第17回 方代の里なかみち短歌大会

募集期間：平成29年7月3日(月)～10月2日(月)

選者：大下一真、今野寿美、三枝浩樹

出詠料：無料

◎問い合わせ／甲府市教育委員会

〒400-8585 甲府市丸の内1-18-1 TEL 055-223-7324

ポストカード販売しています

本号(93号)に同封したポストカードは「白桃」。春夏秋冬32枚の絵柄が一冊になったポストカードブック(1,500円)、各季節のセット(8枚500円)のいずれも取り扱っております。必要分の切手を同封のうえ、封書にてお送りください。



「ご縁ブック2017」「2018年手帖」

ご注文はお早めに! ※詳細は同封のチラシ参照



スタッフの一言 Q.夏の終わりを感ずる風物詩といえば何ですか?



枝豆の色が黒烏茶豆のさみどりから肴豆の苔っぽい緑色にかわり、茄子漬の皮が固くなり、ビールの一口目の干し具合が減り、百日紅を掃く戦いから解放された時、夏は終わる。



誕生日きたら? いや、どうだろう。なんとなく。何がというわけでもなく、ふいに夏は終わる。



夜すごしやすくなり、蛙の合唱がいつの間にか、リーンリーンという虫の聲に変わっていたとき。涼しそうな景色の写真を、なんだか遠く感じたとき。



毎年8月25日にある地元の花火大会。最後の大花火スターマインが終わったあと急にやってくる静けさと寂しさ…。夏好きな私は悲しい気持ちになってしまいました。



高校野球甲子園大会の決勝戦。優勝チームが校歌を歌っている姿、準優勝チームが泣きながら甲子園の土を持ち帰る姿を見ると、今年の夏も終わってしまったと物悲しくなる。



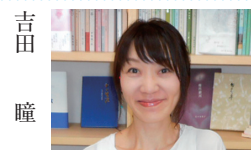
昔は新潟祭りの花火大会が終わると夏ももう終わりだねと寂しい気持ちになったものだが、最近は温暖化のせいかわかっても暑い! 朝目覚めて空が高いな〜と思った時でしょうか。



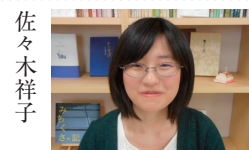
夕方、淋しそうなセミの鳴き声が聞こえて来た時にそろそろ夏も終わりがな〜と感じます。それに大好きなスイカの収穫が終わるとき。



8月の終わりの日中はまだまだ暑いのですが、夜分に洗濯物を干していると「ヒュー」と強い風の音。戸も「ガタガタ」と揺れて、秋到来。夏の終わりを感ずります。



9月上旬まで地元の祭りがあり、そこまでは気持ち夏モード。その祭りが終わると急に静けさと物悲しい気持ちになり、もう秋なんだと感じます。



空にいわし雲が広がり、肌をさすジリジリとした日差しが和らぎ、日が暮れる時間が早くもなってきた頃、ああ今年も夏が終わるなと感じます。

New Face



猫、A・B・C・D・E

佐藤りえ

今日は私を取り巻く5匹の猫の話を書きます。猫Aは推定年齢12歳ほどのメスで、我が家の飼い猫です。山梨県で保護され、千葉県のシェルターに送られ、埼玉県のが我が家に来るといって、猫としてはなかなか波瀾万丈な猫生を送っています。鯖白模様で人見知りで甘えん坊な性格です。よく窓から外を眺めています、他の猫にはあまり関心がないようです。

猫Bは元は近隣の飼い猫だったのが、家主の不在によって置いて行かれてしまった、という境遇の野良猫です。シャムミックスのような柄をしていますが、猫種・年齢は不明です。Bの家はもとと不在がちな家で、彼は近隣に何軒かある、猫の餌や寝床を提供してくれる家をめぐり、半野良生活を送っていたようです。時折Bが元の家の軒下で昼寝している姿が見られます。今でもそこを自分の家と認識しているのでしょう。

猫C・Dは親子で、とても「おしゃべり」です。Cが母親でDが息子という組み合わせのこのふたりは、文字にするに「わにゃにゃにゃ」というような声を発しながらやってきます。Dは根城にしている家の主・Tさんのことが大好きで、自転車で帰宅するTさんの足元にまとわりつき、8の字を描いて甘える姿をよく見かけました（と、この稿を用意している間に、余所猫との喧嘩の傷が原因でDが亡くなったことを知りました。Tさん宅の庭に埋葬されたとのこと）。そして

前回の岡田幸生さんよりバトンを受け取ったのは、歌人で俳人で造本作家の佐藤りえさん。「短歌も俳句も、そして実作も批評も、もれなくすごい人」と岡田さんが評する佐藤さんのエッセイを3回にわたりお楽しみください！

ごく最近、Dにそっくりな子猫がTさん宅に現れ、住み着いてしまいました。まるでDの生まれ変わりのようにT家を拠点に大あばれしているようです。

猫Eはブリティッシュぽい顔立ちをした八割れ模様の大猫で、これら猫の中ではいちばんの新顔です。どこからともなくやってきて、B・C・Dたちと一緒に近所にたむろしています。人をまったく怖がらず、所を選ばず、道路の真ん中や家の玄関先で寝転がっている様子があまりに自然で、ずっと昔からそこにいたような風格を感じさせます。

Bはこの春急激に痩せはじめ、ふらふら歩いている様子が非常に心配で、こまめに餌を与え、見守っていました。すると他の猫もやってくるようになり、いつのまにか我が家はひとかどの猫食堂になりました。給餌の後は家のAに「お前がいちばんかわいいよ」などと言っています。愛情の業が少しわかってしまったような気がします。

近隣に住んでいるのは猫好きな方ばかりではありませんが、今のところ彼らは排除されることなく、皆さんの寛容な精神に支えられ、それなりに元気に暮らしています。

夕刻の給餌を終え、思い思いの場所で毛繕いに精を出すB・C・D・Eを後目に、餌皿を片付けていると、空梅雨の暮れきらぬ空が頭上に高く広がっています。生ぬるい風に吹かれて、ひとりずつ去っていく猫を見送りながら、日々はあわただしく、なんとなく、どんどん過ぎていくのです。

●プロフィール
1973年 宮城県仙台市生まれ。埼玉県在住。
1997年 第9回宮城県短歌賞受賞。歌集に『フラジャイル』（風媒社）
『What I meant to say.』（私家版）。

編集後記

子どもの頃、8月は楽しさの象徴の月だった。能天気ないわば幸せなご身分だったのだろう。今も能天気はさほど変わっていないが、8月、ああ暑い…くらいなもので逆にマイナス面ばかり思いつく。当社は8月が新年度のスタート! お客さまにどうしたら当社の価値を提供できるのか? そもそも当社の価値って? 生まれた時から死ぬまで、立ち止まったとしても前へ行くしか道はないわけで、後ろを向いても戻れないわけで、であれば前向きで行こうと改めて思うのです。前へ前へ。お客さまにいろいろとお尋ねのお電話をするかもしれません。お声、本音をお聞かせください! (木戸敦子)

2017.8-9. vol.93 (2017年8月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージック・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

0120-819-395 Facebookもチェック

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージック・コーポレーション